幕末～昭和初期の
日露関係史の知られざるエピソード

日程	第1回	第2回	第3回	第4回
	4/4	4/18	5/16	5/30

15:30～17:00

講師　ロシア・東欧学会会員
上野 俊彦
uenot_gosudarstvo@yahoo.co.jp
http://uenot.g1.xrea.com/

第4回
満鉄と
哈爾濱
（ハルピン）

①2024/4/4　15:30~
ヘダ号の話
②2024/4/1　15:30~
ニコライ皇太子の来日
③2024/5/16　15:30~
神田ニコライ堂の話
④2024/5/30　15:30~
満鉄と哈爾濱（ハルピン）

講義概要

1　東清鉄道関連年表
2　哈爾濱建設の始まり
3　哈爾濱経済の発展
4　満洲国と哈爾濱
5　哈爾濱の中のロシア
6　長春（旧満洲国首都・新京）
7　満州国皇帝仮宮殿
8　大連と旅順

写真は、とくに断りのない限り、すべて講師が2007年7月の現地調査の際に撮影したものである。その後、現在までの17年間に中国は高度経済成長を遂げ、街並みは相当程度、変貌したと思われるので、その点はご承知おき下さい。

この講義の目標

①東清鉄道・南満洲鉄道の建設の経緯について知る。
②哈爾濱・長春・大連の都市計画について知る。
③哈爾濱・長春・大連の現状について知る。

本講義の参考文献

- 越澤明『満州国の首都計画』（ちくま学芸文庫　2002）
- 越澤明『哈爾浜（はるぴん）の都市計画』（ちくま学芸文庫　2004）
- 麻田雅文『中東鉄道経営史』（名古屋大学出版会、2012）

東清鉄道*1関連年表①

1891	シベリア鉄道建設開始。
1894	プリモーリエ（沿海州）とザバイカリエ（バイカル湖以東）のあいだのアムール川（黒龍江）地域を踏査した結果、この地域の鉄道敷設が容易でないこと、ウラジヴォストークとチタを最短距離で結ぶことで工費を節約できることが判明*2。
1895/4/17	日清講和条約調印、1894/7/25に始まった日清戦争が終結。日本は、賠償金と遼東半島租借権を獲得。
4/23	独仏露3国が日本に抗議し（三国干渉）→最終的に、日本は遼東半島租借を断念。
12/28	「露清銀行条例」*3制定。清国、露清銀行を通じ、日清戦争後の下関条約で決まった日本への賠償金支払のための原資として、ロシアから融資を受ける。露清銀行が東清鉄道の親会社となる。中国が500万両を出資（預金扱い）→東清鉄道を合弁事業のように見せる。
1996/3/31	ウイッテ蔵相、鉄道を通じて中国東北をロシアの勢力圏に入れて列強に伍すべき、と上奏。
6/3	「露清密約」*4（「露清同盟条約」または「李鴻章＝ロバノフ協定」とも言う）締結。日本が極東ロシア、清国、朝鮮を侵略した場合の相互援助の約束や、ロシアがチタから吉林省・黒龍江省を通過しウラジヴォストークに通じる東清鉄道および東清鉄道のスンガリー川渡河地点の哈爾濱（ハルピン）から旅順までの南満洲支線の建設に対する清国の許可などが取り交わされている。

*1「東支鉄道」ともいう。また、日露戦争後のポーツマス条約により日本が長春以南の「南満洲支線」を譲り受けると、残りの部分は「北満鉄路」と呼ばれるようになった。なお、当時の中国語は「中東鉄路」。専門家のあいだでは「中東鉄道」と呼ばれることが多い（例えば、前掲、麻田雅文『中東鉄道経営史』）。

*2 同上、36～37頁。

*3『ロシア帝国法令全書』第3集第15巻、1895年の項、698～707頁、法令番号第12242号（*Полное собрание законов Российской империи, собрание третье, Т. XV,* 1895 г., с. 698-707, № 12242.）。

*4『満蒙問題関係の重要条約摘要』（国立公文書館アジア歴史資料センター https://www.digital.archives.go.jp/das/image/M0000000000000758916）。ニコライ2世戴冠式に派遣された李鴻章とロシア外相ロバノフ・蔵相ウィッテがこの条約に調印した。3

東清鉄道関連年表②

1896/9/8	露清銀行と中国政府、「中東鉄道の敷設および操業に関する契約」*1 を締結。第6条第3項「会社ハ其土地ニ関シ絶対的且排他的行政権ヲ有スヘシ」。正文はフランス語で、中国政府は、国内の反対を抑制するため正しく翻訳しなかった可能性が指摘されている。ロシアは鉄道駅を中心に広大な用地を買収、行政権（警察権、駐兵を含む）を行使し、鉄道付属地という植民地システムを生み出した。
12/6	東清鉄道会社定款の制定。
1897/3/1	東清鉄道会社設立。
6月	本線部分、踏査・基本測量開始。
8/29	東清鉄道会社起工式。
1898/1/21	本線部分、基本測量終了（南満洲支線の踏査は1898年春-1899年）。
2月	東清鉄道技術標準。用地は線路の両側約43メートル。将来の発展が予想される駅は線路の両側に約55ヘクタール、その他の駅は約33ヘクタールを確保。満鉄が引き継いだ南満洲支線では線路用地の幅は最大427メートル、最小で43メートルであった。 松花江（スンガリー川）渡河地点に鉄道建設拠点を建設→のちの哈爾濱。
3/27	旅順大連湾租借に関する条約の締結。関東州の25年間の租借。
7/6	東清鉄道南満洲支線に関する条約の締結。
1899/2/17	東清鉄道会社条例第一追加。南満洲支線、大連の築港、汽船会社について定める。

1896-99年、ロシア、清国の対日賠償を支援した代償として複数の条約を締結し、旅順・大連の租借、東清鉄道（本線と南満洲支線）の建設・経営権を取得。

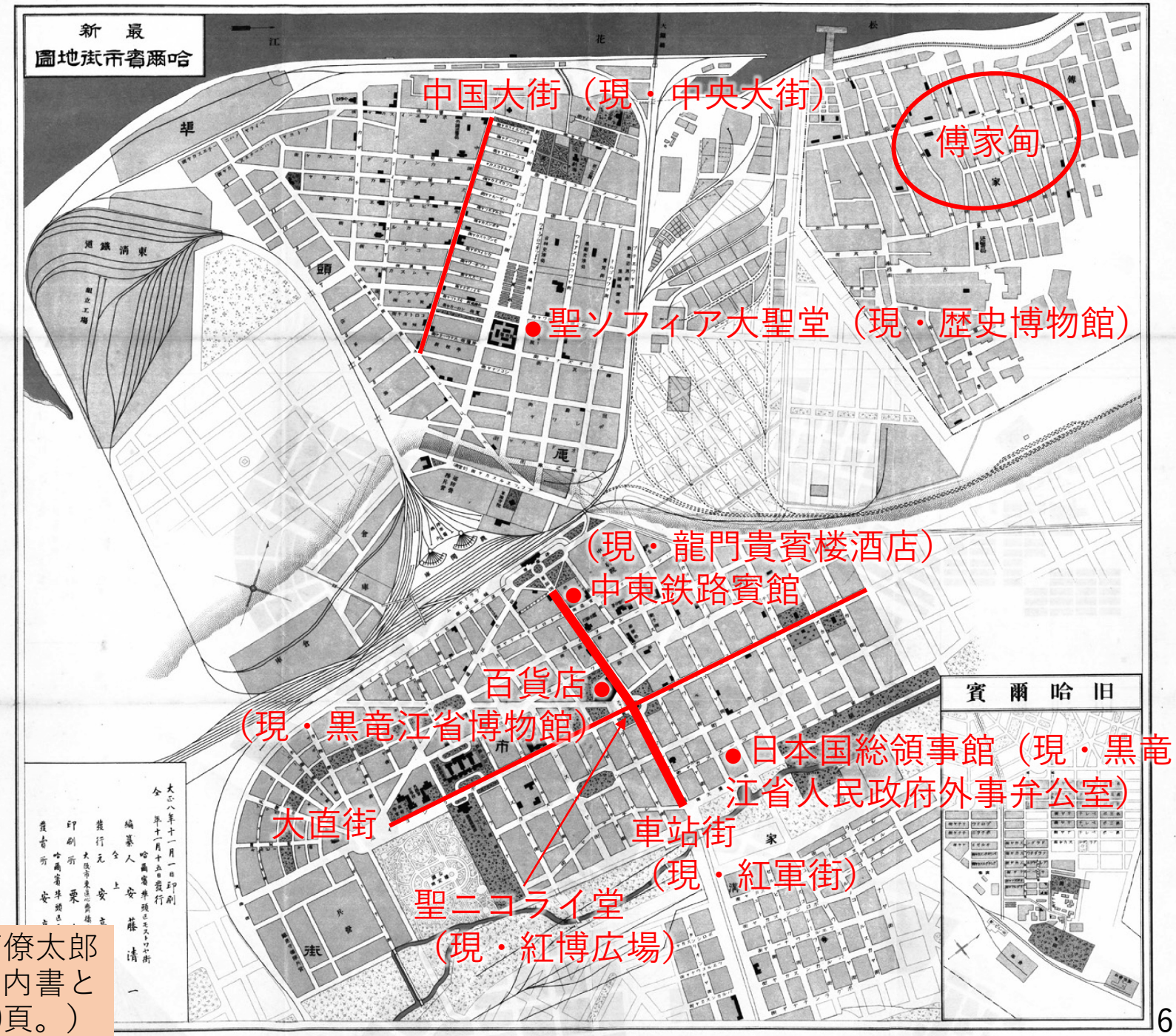
*1 邦訳は、『附録第２、東支鉄道建設及経営に関する契約』（アジア歴史資料センター、Ref.C15120456700、陸軍省パンフレット[19冊]、1932、https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/listPhoto?LANG=default&BID=F2015120913374680251&ID=M20151 2091337 5380367&REFCODE=C15120456700 ）。なお、オンラインで見ることができるロシア語原文は、https://www.vostlit.info /Texts/Dokumenty/China/XVII/1680-1700/Rus_kit_dog_prav_akt/61-80/65.htm

東清鉄道関連年表③

1899/8/11	大連自由港設定に関するニコライ2世の勅諭。
1901/2/21	東清鉄道本線東部線（哈爾濱－綏芬河）竣工。
7/18	東清鉄道本線南部線（哈爾濱－旅順）竣工。
1901/8/2	東清鉄道付属地帯における法権に関するニコライ2世の勅令。
11/4	東清鉄道本線西部線（哈爾濱－満洲里）竣工。
1902/1/14 露暦1月1日	全線仮営業開始、東清鉄道会社黒龍江省内の採炭契約の締結。
1903/7/14	全線営業開始（露暦7月1日）。
1904/2/8	日露戦争勃発（日本の宣戦布告は2/10）
1905/9/5	日露講和条約（ポーツマス条約）調印
1907/7/30	第一次日露協約調印（日露同盟へ）
1916/7/3	第四次協約調印

哈爾濱建設の始まり

1898年5月、鉄道建設局、哈爾濱に設置。7月、露清銀行開店。
1898年秋、流入する中国人の居住区（中国大街Китайская улица）を埠頭区に設置するため都市計画がスタート。日本人街（Японская улица）もできる（最初の日本人は女郎屋）。
当初の都市計画は平凡な碁盤目で、ヴィスタVista（見通し景観）もなかった。
新市街（Новый город）の都市計画を立案。街路、広場、寺院、病院、鉄道管理局、墓地などの主要施設の配置を決定。
2本の幹線道路（車站街Вокзальный проспект、大直街Большой проспект）の交差地点にロータリーを置き、ロータリー中央に中央寺院（聖ニコライ堂）を建設。車站街（Вокзальный проспект）は幅員103メートルの並木道（бульвар）。大直街（Большой проспект）は幅員43メートル。



1919年8月発行最新哈爾賓市街地図（出典：中西僚太郎「20世紀前半における日本人作成のハルビン案内書と市街地図」『歴史人類』第50巻、2022年2月、20頁。）

哈爾濱経済の発展

日露戦争	経済発展の契機＝数十万のロシア軍めあてに商工業者が集まる。
日露戦争後	大豆輸出がさかんになる。
第一次世界大戦中（1914～18）	対露輸出の中継地点としてにぎわう→日本の経済進出。
第一次世界大戦後	中国東北地方の農業生産が増大し、大豆油の製油業、小麦の製粉業が急速に成長。

大銀行の支店開設	
1912	横浜正金銀行（日系）
1914	交通銀行（中国系）
1919	東洋拓殖株式会社（日系）
1921	金城銀行（中国系）
1923	香港上海銀行（中国系）、ナショナルシティ銀行（英米系）
1928	チャータード銀行（英米系）
1929	大中銀行（中国系）

国際商業都市としての発展

白系（亡命）ロシア人が唯一政治的・経済的基盤を持つ都市。

哈爾濱学院と上智大学ロシア語学科

1920/9/24　日露協会*（1906年発足）により日本外務省所管の旧制専門学校「日露協会学校」が哈爾濱市に設立される。
1932/4　哈爾濱学院と改称。
1940/3　満洲国立大学哈爾濱学院大学と改称。
1945/8　日本の敗戦・満洲国の廃止により、廃校。
1956/10/19　「日ソ共同宣言」により日ソ国交正常化。抑留されていた哈爾濱学院関係者帰国。
1957/4　上智大学文学部外国語学科ロシア語専攻発足（翌58年4月に外国語学部ロシア語学科に改組）。上智大学外国語学部ロシア語学科創設時の教員の中心が、ネイティヴ教員を含めて旧哈爾濱学院教員・卒業生であったことから、戦後も活動を続けていた哈爾濱学院同窓会が基金を上智大学に寄付、上智大学哈爾濱学院顕彰基金として、1990年頃からロシア語学科優秀学生等への奨学金・研究助成などがなされるようになった。また、創設時には日本正教会の協力もあって、教員にはニコライ神学校卒業生もいた。

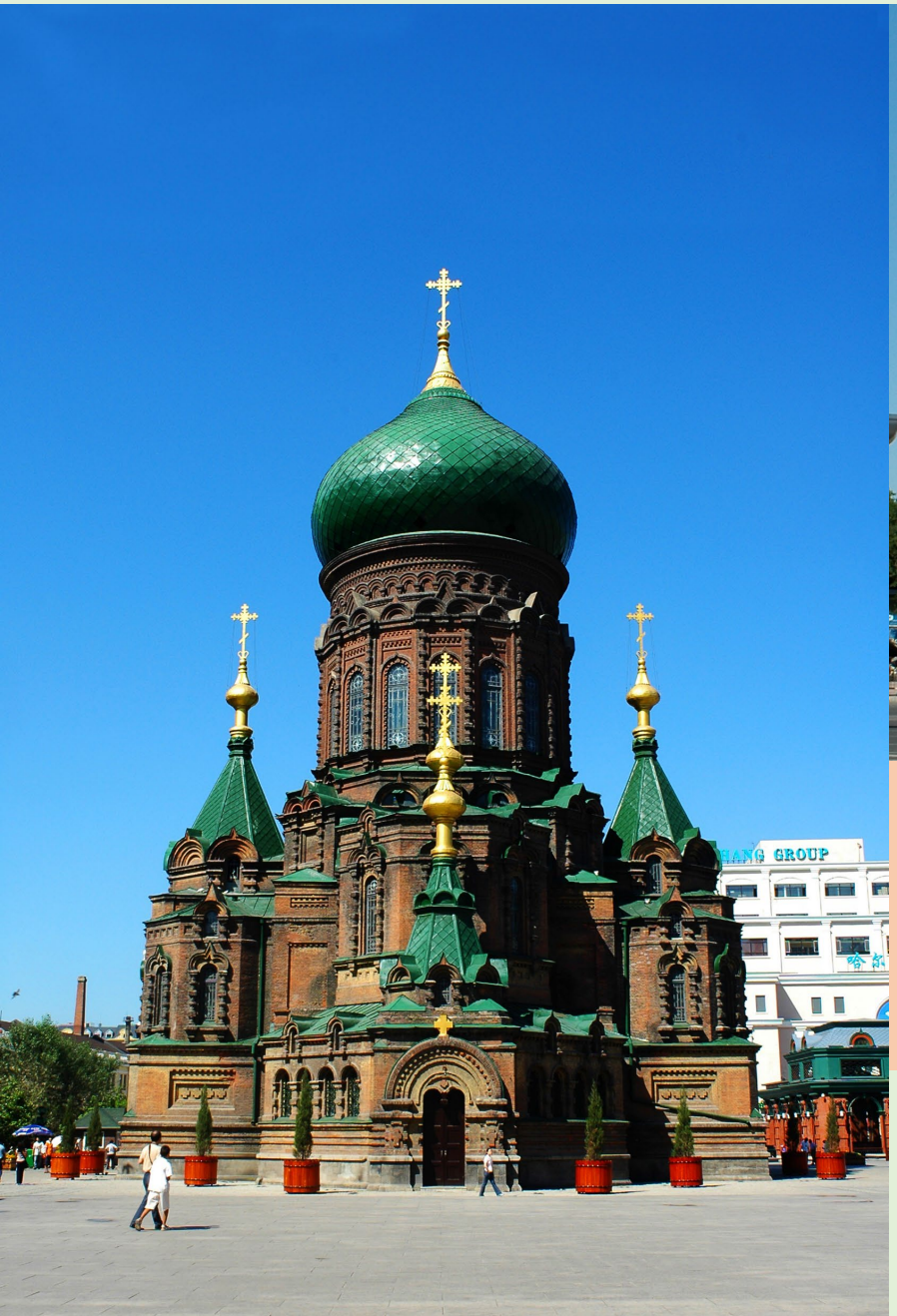
* 日露協会は、会頭を寺内正毅（陸軍大臣、外務大臣、大蔵大臣、総理大臣などを歴任した軍人・政治家）、副会頭を後藤新平（台湾総督府民政長官、満鉄総裁、逓信大臣、内務大臣、外務大臣、東京市長などを歴任した政治家）とする、事実上の官製組織。

満洲国と哈爾濱

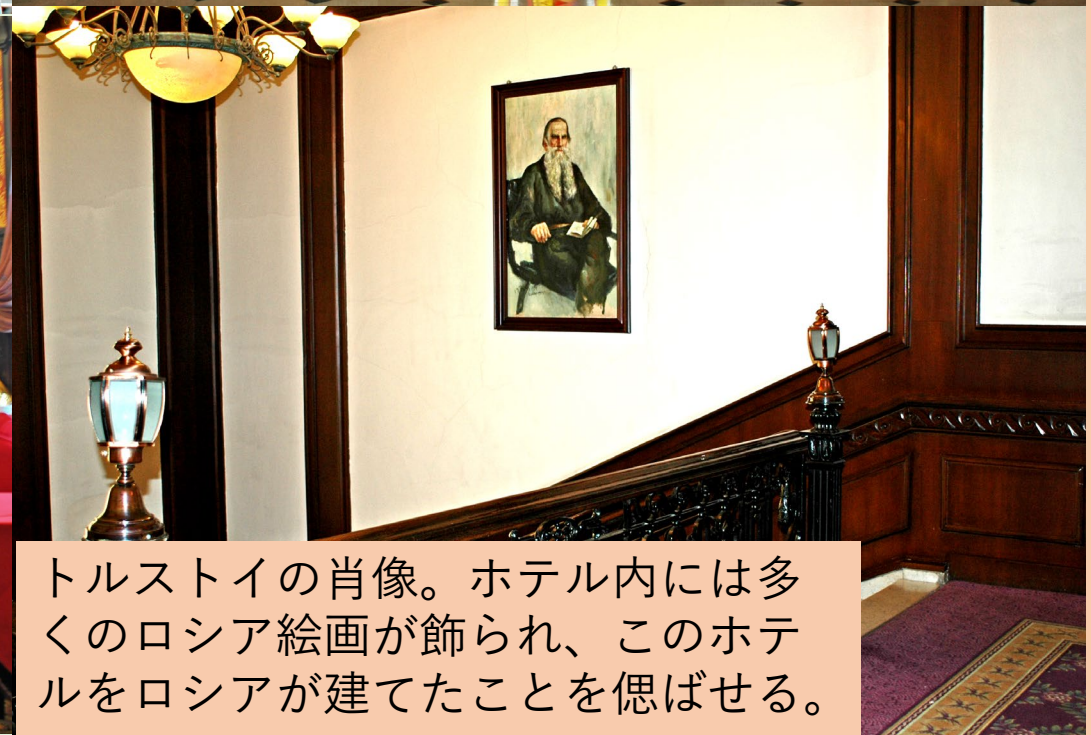
1931/9/18	関東軍、奉天郊外柳条湖の南満洲鉄道線路を爆破、中国軍のしわざとして、総攻撃を開始（満洲事変）。
1932/3/1	満洲国建国宣言。関東軍特務部と満鉄調査部、植民地政策を企画立案。新京、哈爾濱、奉天、大連などの都市計画を立案。ロシアの都市計画を継承。
1933	満洲国下でも中東鉄道（日露戦争後、南満洲支線が日本に譲渡されたため、ロシア側経営の東清鉄道を中東鉄道と改称）経営はソ連（形式的には中ソ共同経営）が継続していたが、漢字に限りソ連は「北満鉄路」の呼称の使用を許可した。
1935/3	ウラジヴォストーク、ハバロフスクに満洲国領事館開設。
3/23	満洲国・ソ連間で中東鉄道（北満鉄路）を有償で満洲国に譲渡する協定締結。ソ連が放棄した理由は赤字経営だったため。この協定によりソ連は満洲国を承認。

旧満鉄本社ビル（大連）↓ 下水口の蓋の満鉄社章↑

哈爾濱の中のロシア



左・旧聖ソフィア大聖堂。1907年にロシア正教会の大聖堂として建造された。現在は、歴史博物館となっている。哈爾浜のシンボルともなっている。
上・黒竜江省博物館。1904年に建造されたこの建物は、当初は、百貨店だったが、1922年から博物館となり、1951年から哈爾濱市が管理、1954年に現在の名称となった。2階窓の形状に20世紀初頭に流行していたアール・ヌーヴォー様式の建築の特徴が見られる。



トルストイの肖像。ホテル内には多くのロシア絵画が飾られ、このホテルをロシアが建てたことを偲ばせる。

哈爾濱駅前にある龍門貴賓楼酒店（ホテル）。東清鉄道工程局副総技師イグナチウスが全体設計を指揮し、1903年2月、ロシア風アールヌーヴォー様式の「中東鉄路賓館」として建造。車站街初の建築で、哈爾濱初の豪華ホテル。日露戦争時はロシア軍司令部として使用、戦後は東清鉄道本社となる。
満洲国建国後の1936～37年に改装、満鉄経営「哈爾濱大和旅館（ヤマトホテル）」となる。第2次世界大戦後、ソ連専門家楼、軍招待所として使用。1997年、哈爾濱鉄路局により「龍門貴賓楼酒店」として改装。

現在の哈爾濱で、戦前のロシア風の建物が最もよく保存され、メンテナンスされているのは、哈爾濱駅北口方面にある、かつての中国街、現・中央大街であり、前掲の聖ソフィア聖堂も中央大街の近くにある。

东北虎皮草

これらの写真の建物は、いずれも、第二次世界大戦前までは中国人街の傅家甸（ふうじゃぁでん）と呼ばれていた、現在の靖宇街と南七道街に囲まれた地域にある。この地域は、中央大街と異なり、古いまま十分に整備されていない建物も多く、建物によってはかなり痛んでいる。この付近の建物は、当時の中国人商人が、ロシア人の建てた建物を真似て造ったとされているが、中国人好みの過剰装飾が見られる。とくに建物のファサード（壁面）の浮き彫りなどが、中央大街の建物と比べても手が込んでいる。

日本国総領事館だったことを示す案内板

哈爾濱日本国総領事館（現・黒竜江省人民政府外事弁公室／黒竜江省人民対外友好協会）。車站街から少し奥に入ったところにある。案内板によると、1920年建造とあり、一級保存建築物とされている。

長春（旧満洲国首都・新京）

関東軍司令部全景（現・中国共産党吉林省委員会）

関東軍司令部側面

満洲国皇居（未完成）（現・吉林大学地学部）

満洲国軍事部（現・吉林大学付属第一病院）

関東軍司令部は、日本の城郭のような建物で、中国には不似合いな建物である。
旧満州国は日本政府の傀儡であり、事実上、満州国を支配していた関東軍司令部は、まさに日本帝国主義の象徴であり、それゆえ城郭建築だったのかも知れないが、日本にあれば美しい建物も、この国土に置かれると醜く見える。
皇居は、第二次世界大戦終了までに完成が間に合わなかった壮大な建物であり、その前に広がる文化広場も途方もなく広く、一部はサッカー場やテニスコートになっていたが、満州国の首都建設計画が極めて壮大な計画だったことを推測させる。

満洲国国務院（国会）（現・偽満州国務院旧址）全景

満洲国国務院（国会）側面

満洲国国務院（国会）正面

皇居の周辺や南側には、満州国の軍事および政治の中枢機関であった建物がそのまま残されている。
文化広場の南東、満州国軍事部と向き合っている建物は、満州国国務院（国会）で、現在は吉林大学基礎医学部の建物として使用されている。
この建物が旧満州国国務院であることを示すのは、「長春偽満州国務院旧址」と書かれた看板と、当時の写真を掲示したパネルだけである。

満洲国司法部（現・吉林大学医学部）

満洲国交通部（現・吉林大学医学部公共衛生学科）

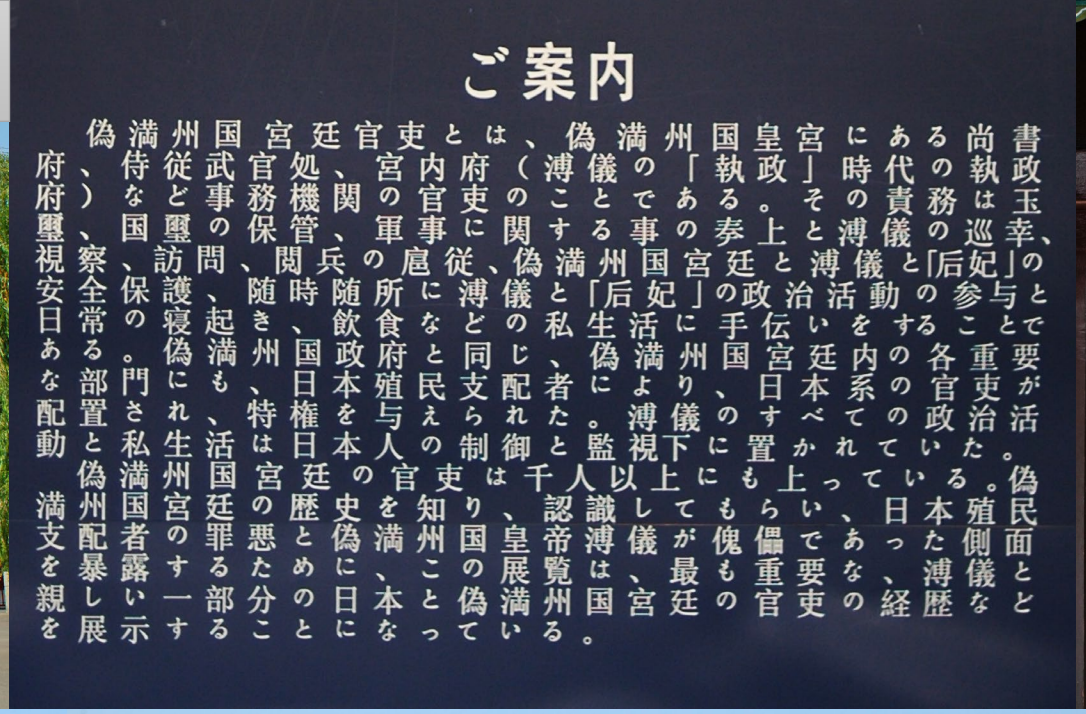
満洲国経済部（現・吉林大学付属第三病院）

満洲国総合法衙（現・人民解放軍第461病院）

皇居から南に伸びる新民大街の両側に旧満洲国政府機関の建物がある。新民大街の東側に満州国司法部（現・吉林大学医学部）、新民大街を挟んで司法部の向かい側に経済部（現・吉林大学付属第三病院）がある。経済部の南に交通部（現・吉林大学医学部公共衛生学科）、新民大街が南湖公園に突き当たったところにある新民広場に面して総合法衙（現・人民解放軍第461病院）がある。以上は、いずれも、計画都市・新京に、日本によって建てられたものであり、和洋折衷のデザインに特徴がある。

満州国皇帝仮宮殿

満洲国皇帝仮宮殿玄関（現・偽満皇宮博物院）



ご案内

書政玉幸、のとで要が活
尚執は巡妃」与と重吏治た。偽民面とと
るの務の「后妃」の参こ重吏治た。殖側儀な
あ代責儀と動するのの各官政いる。本た溥歴
に時の溥儀活を内系てれて日っ、経
宮」そと溥治い廷本べか上いで要吏
皇政。上と政伝宮日す置もら儒重官
国執る奉廷の手国、のにも傀もの
州「あの宮」に州り儀下てが最廷
満ので事国妃活満よ溥視上し儀、宮
偽儀とる州「后生偽に。監以千人識溥は国
溥こす満と私、者たと認帝覧州る。
、（の関偽儀のじ配れ御、皇展満い
は府吏に従、溥ど同支ら制は、り国の偽て
と内官事扈になと民えの吏知州ことっ
吏宮の軍の所食府殖与人官を満、本な
官廷、関、兵随飲政本を本の史偽に日に
廷処機管、閲時、国日権日廷歴とめのと
宮官務保、随き州、特は宮の悪た分こ
国武事の問、起満も、活国廷罪る部る
州従ど璽訪護寝偽にれ生州宮のす一す
満侍な国、保の。門さ私満国者露い示
偽、）、察全常る部置と偽州配暴し展
府府璽視安日あな配動　満支を親を

仮宮殿には複数の建物があるが、どの建物も「仮」とはいえ、思いのほか狭い。建物の内部には、皇帝の執務室・寝室、皇妃の居室・寝室、侍従たちの執務室、会議室、謁見のためのホールなどがある。皇帝溥儀や皇妃たちの写真も数多く展示されている。

大連と旅順

日清戦争で勝利した日本は、清国から遼東半島の租借権と多額の賠償金を奪取することになったが、独仏露3国が日本に抗議し（三国干渉）、日本は遼東半島租借を断念。他方、中国は多額の賠償金の支払いに困り、それをロシアが援助することになり、1896～99年に清露間で一連の条約が締結された。この条約により、こんどはロシアが大連および旅順の租借、ならびに東清鉄道の建設と経営の権利を獲得した。

東清鉄道は、ウラジヴォストークから哈爾濱を経てチタに至るシベリア鉄道のショートカット部分（T字型の水平部分）と哈爾濱から大連および旅順に至る南満洲支線（T字型の縦線部分）とに分かれている。ウラジヴォストークは冬季に凍結するため、明治初期にはロシアの東洋艦隊は1年の半分は長崎を母港としていたが、20世紀に入るとロシア海軍は旅順を母港とし、大連をシベリアや満洲地域に直結する商業港として利用しようと考えた。こうしたロシアの鉄道敷設・満洲開発計画の拠点都市が哈爾濱と大連であった。しかし、日露戦争後、東清鉄道南満洲支線、大連・旅順は日本の管理下に置かれることとなり、その後、満洲国の時代を通じて、第二次世界大戦の終了まで、事実上、日本の管理下に置かれていた。

満洲国は、明らかに日本の中国侵略の隠れ蓑であり、日支満蒙韓の五族協和のスローガンは日本の朝鮮半島と中国東北地方の植民地経営を隠蔽するものに過ぎなかった。日本の中国侵略や満洲国建国は非難されなければならないが、他方で、この地域で日本が建設したインフラや建築物、実施された都市計画が技術的に見て優れたものがあったこともまた事実である。

大連は、ロシア人が、哈爾濱、旅順とともに、極東の拠点として建設した街であった。したがって、ヨーロッパ的な都市計画によって造られた近代的な大都市である。中国や日本の伝統的な都市計画では、碁盤目状（格子状）に道路が造られるが、ヨーロッパでは、城や教会などを中心に同心円状に道路を造り、同心円の中心にロータリーを設けるのが都市計画の特徴の一つであり、哈爾濱や大連には、北京などにはない、ロータリーがある。

日露戦争後、事実上、日本が管理するようになった大連には、日本が建設したと思われる建物も数多く残されており、大規模な日本人街もあった。旧日本人街では、いまや日本国内ではほとんど見ることができない第二次世界大戦前の日本人の都市中産階級の戸建て住宅（いわゆる文化住宅）が数多く残されている。

大連警察署（現・遼寧省対外貿易経済合作庁）

満鉄大連大和旅館（ヤマトホテル）（現・大連賓館）

横浜正金銀行大連支店（現・中国銀行大連支店）

朝鮮銀行大連支店（現・中国商工銀行大連支店庁）

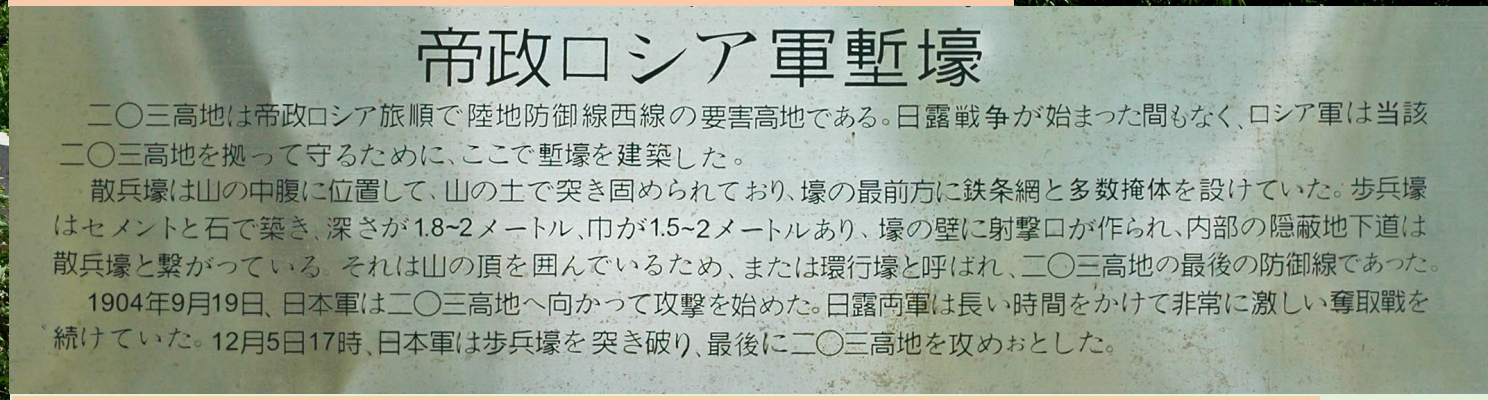
大連には、日本の都市には珍しいロータリー（円形広場）がある。このロータリーは中山広場といい、かつての大連の中心であった。
当時の名建築が広場を囲んでいるが、全体としてはデザインや高さに統一性がなく、それは当時の日本の都市計画の限界だったかも知れない。
しかし、それでも、現在の大連市民にとっても、この中山広場が大連のシンボルの一つであることに変わりはないようだ。

大連日本人街の家並み。老朽化している住宅が多い中で、比較的、綺麗に修復されて使用されている住宅を選んでいる。
1918（大正7）年に開発が始まり、1923年に分譲が開始された東京の田園調布に建てられていたのと同様の、いわゆる文化住宅が並んでいた様子が現在でも見て取れる。
比較的大規模な住宅は、現在は、共同住宅として複数の世帯が居住している。

旅順駅舎

203高地から旅順港を望む。直線距離にして約4km

203高地砲台



帝政ロシア軍塹壕

二〇三高地は帝政ロシア旅順で陸地防御線西線の要害高地である。日露戦争が始まった間もなく、ロシア軍は当該二〇三高地を拠って守るために、ここで塹壕を建築した。

散兵壕は山の中腹に位置して、山の土で突き固められており、壕の最前方に鉄条網と多数掩体を設けていた。歩兵壕はセメントと石で築き、深さが1.8~2メートル、巾が1.5~2メートルあり、壕の壁に射撃口が作られ、内部の隠蔽地下道は散兵壕と繋がっている。それは山の頂を囲んでいるため、または環行壕と呼ばれ、二〇三高地の最後の防御線であった。

1904年9月19日、日本軍は二〇三高地へ向かって攻撃を始めた。日露両軍は長い時間をかけて非常に激しい奪取戦を続けていた。12月5日17時、日本軍は歩兵壕を突き破り、最後に二〇三高地を攻めおとした。

203高地に残るロシア軍塹壕の案内板（中英日併記の日本語部分）